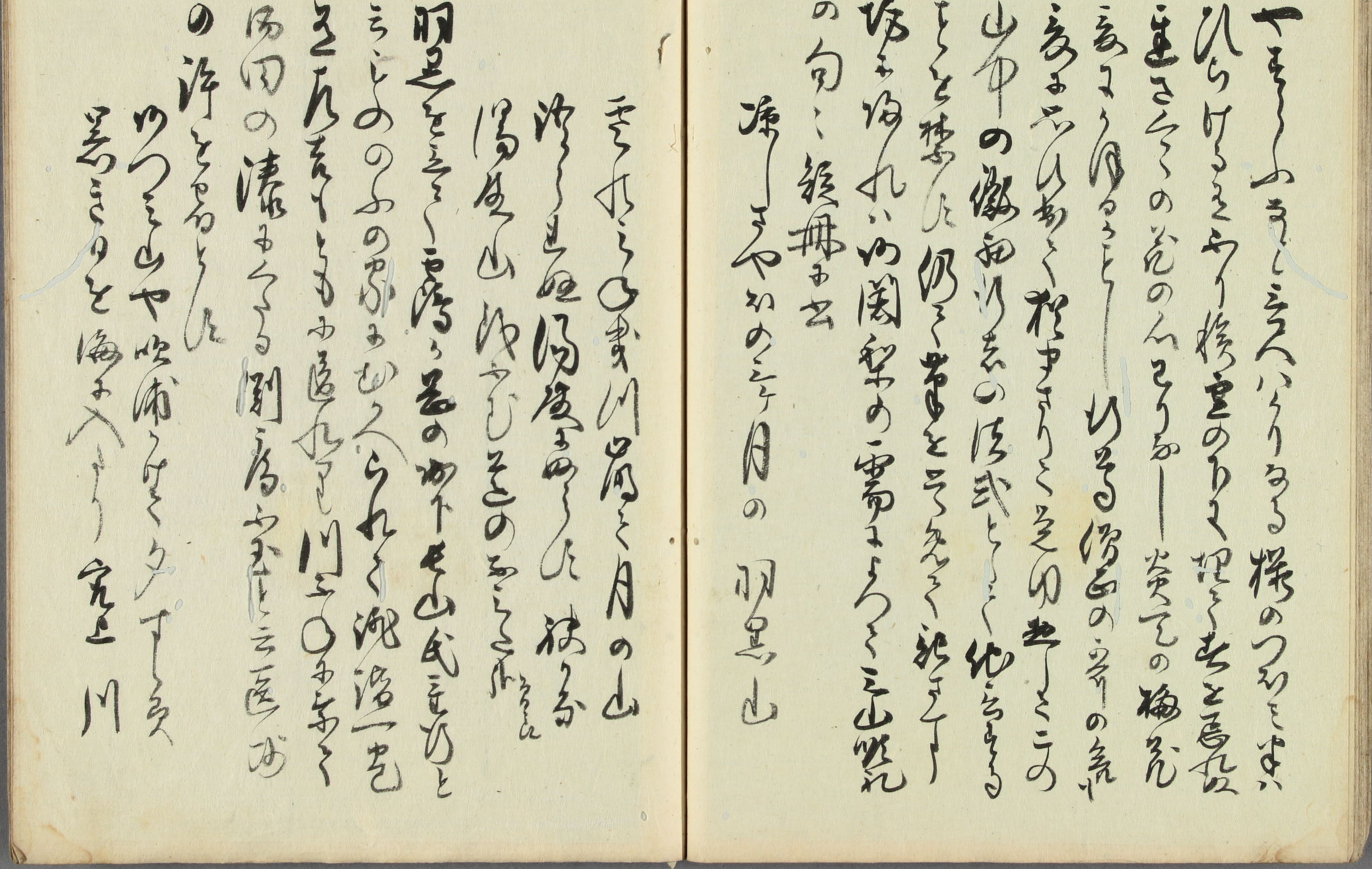
奥細道

全



やましふまじ云人ハかりなる様のつれをよハ
ひらけるをかり様宣のりて埋さ者を長故
生さくの花のんとりなし　黄花の梅花
家にかゝるとし　けるる僧正の前の流れ
家にかひあて程中さりて是切也　この
山中の徴和行者の法式としてくれたる
とを禁ひ仍て常をそ免て祈さすし
坂に降れハ此関梨の雪によつて三山照れ
の句に続冊に出
源しさやれのこゝ月の　羽黒山

雲れこ○東川嶺て月の山
流しも旺湯度にあらひ　秋の分
湯度山　沙かむ是のあらさ
羽黒をさくて湯の花の如下も山氏主行と
云ことのふの事にむへられて洲浩一老
を見ましとも云返れ　川上○に来て
湯田の漬にくる　関房　かまと云医が
の許をもとし
此つ三山や吹浦かけて夕すゝ矣
黒きりを海に入より　宮上　川

江山水陸の風光数を尽して今象潟
に方寸を責む酒田の湊より東北の方山
を越磯を伝ひいさごをふみて其際十
里日影やゝかたぶく比汐風真砂を吹上
雨朦朧として鳥海の山かくる闇中
に莫作して雨も又奇也とせば雨後の
晴色又頼母敷と蜑の苫屋に膝をいれて
雨の晴を待其朝天能霽て朝日
花やかにさし出る程に象潟に舟をうか
ぶ先能因島に舟をよせて三年幽居

の跡をとふらひむかふの岸に舟をあがれば
花の上こぐとよまれし桜の老木西行
法師の記念をのこす江上に御陵
あり神功后宮の御墓と云寺を干満
珠寺と云此処に行幸ありし事いまだ
聞ずいかなる事にや此寺の方丈に座
して簾を捲ば風景一眼の中に尽
て南に鳥海天をさゝえ其陰うつり
て江にあり西はむやむやの関路をかぎり
東に堤を築て秋田にかよふ道遥

月ゆくハ尋ぬるよりふかれハ書なるへしと
さるむしりしの源によるかゝる風情ハ何
れしやうて尋ひて其の景ハ二相
と下つとて冬月ハつるのこゝろとそ
あらん三等の義も其に是ならんと猶かゝ
しくらくにて此の枝れとこれ立
所に拙か嶽かくれて此那か山る時なる
あさむ川の橋とまたりて玉口の其意ハ穏
にむかしり等の草をとて湯尾論を
知れハ煙か城の見るやまに和房なるを

十四日の夕くれつるの御しきをもしむ
その相月雑話より此の相かゝる金
にやと云ハ御所の賀ひ相の信雑
まゐりこうしと申しにあらんとて
者いの明番に相まゐれ仲哀天皇の
御廟に社ひ沐さひて相の年の賀に
月のとり入るかゝ人の多然言葉を歌る
かゝしし性言葉に二世の上人大能
長起のるゝ申りてこつて草を刈ち石
を荷ひ泥濘をかハかせて手洗法身

2000

下ニ和逸ハ今ニ其ヲ知ルヲ得ル
模写ニ為ルノミ